

バッハの死の音楽

—バッハ没後 250 年記念演奏会(5/14)に寄せて—

大村 恵美子

敬愛するセバスティアン

長年あなたの音楽を演奏しつづけてきた私ですが、あなた自身の個人的な記念日にささげるために、一夕のプログラムを組んで、あなたに喜んでいただこうと考えたのは、おそらく今回が初めてでしょう。1750年7月28日の、あなたのご命日を記念して、これまでも毎年、世界各地で、BWV106《神の時は いともただし》が演奏されたりしています。私も、いつかは、あなたの死を記念するコンサートを、BWV106を入れたプログラムで迎えたいと願い、それが250年後にあたる今年、やっと機会を得たというわけです。(このカンタータそのものは、これまでに1969年、1976年、1980年と3回演奏しています。)

今回演奏する4曲は、新進音楽家として自立しはじめた22歳(BWV106)から、円熟を極めた54歳(BWV236《小ミサ曲ト長調》)に至るまでの、あなたの長い精進の道のりの間に作られた作品たちですが、その30年間余の創作で、あなたは生死に対するはっきりとした信念を、みごとなほど一貫させています。最初期の、カンタータとしても初めての作品であるBWV106は、<Actus tragicus>(追悼式)と自らタイトルをつけた、葬儀用の音楽だとされていますが、他の3曲は、特に葬儀と直接関連があるわけではありません。ただ私が特にこの日のために選んだものです。

BWV156《墓に片足入れ》は、第1曲のシンフォニアの気分、第2曲テノール・アリアの“墓に片足入れ”という冒頭の歌詞からして、すでに死を想わせるものです。BWV56《十字架を勇みて負わん》も、最終コーラルが“眠りの兄弟である死よ来たれ”と歌い出しますが、死というよりもむしろ人生全般をテーマにしています。BWV236は、これも、畢生の大作《ロ短調ミサ曲》に先立って、セバスティアンの信仰をこめて壮大に歌いあげた讃美であるわけですが、あなたのもっとも意気盛んな精力に溢れた生命力表現の代表作として、ふさわしく感じられるのです。

つまり、あなたにおいては、死と生は一体をなしているのです。充実して生きるものに贈られる成就としての死、これがあなたの音楽から教えられるものです。まだまだ、<死>という語が直接歌われる作品は、他にも数多くありますが、今回のこのようなプログラムも、あなたに喜んでいただけたらと願いつつ、準備しました。

1. カンタータ《墓に 片足入れ》

BWV156

1729年1月23日(推定)、ライプツィヒ初演。あまりに美しく有名な第1曲シンフォニアばかりに気をとられて、他の部分がいまひとつ訴えの弱いものを感じられていましたが、やはり練習を重ねてゆくにつれて、深く慎ましいセバスティアンの人生の達人ぶりが、輪郭を浮かびあがらせてきました。1994年に書いた『バッハの音楽的宇宙』(丸善ライブラリー)のなかでは、私は次のように紹介しています。

「この日の聖書章句(マタイ8:1-13)では、イエスは重い皮膚病患者を癒し、カファルナウムの百人隊長の信仰に感動して、その部下の中風を、百人隊長が帰りつく前に、癒してしまった。しかしバッハがこのカン

タータで表現したのは、病の床で臨終を迎える者の諦念と憧れである。第1曲のシンフォニアの、オーボエ独奏によるアダージョの、何と静かでやさしくて深く悲しいことか。言葉をもたぬオーボエの旋律が、ほとんど一吹きのように滑らかに、人生の始めから終りまでを語り尽くしてしまう。旋律のほんとうに圧倒的な表現力。肉体の死など、全く眼中にないほどに透き通った、比類のない高みと深みの境地。……静かに、従順に、厳かに、暖かく、神のみもとに憧れゆく人生最後の美しさ。」

2. カンタータ《神の時は いとも ただし》

BWV106

1707/08年、ミュールハウゼン初演。

初々しい青年の息吹きをもって、将来くりひろげられるべき、おのれの人生に思いを致し、その果てに散華する死の厳粛さと桜の花吹雪のようなアーメンコーラス。この比類のないカンタータは、初期の創作意欲の強さから、音域が極端に広く用いられ、演奏上の困難さを感じる場所があります。旧全集では変ホ長調だったのが、新全集ではヘ長調で記譜され、今回はそれに沿って演奏しますので、全体に明るく輝きを増した印象になるかと思えます。

リコーダー2、ヴィオラ・ダ・ガンバ2と通奏低音、という禁欲的な楽器編成ながら、声楽部分は、旧・新約聖書から巧みに綴られたテキストに従って、独唱・合唱を数繁く交互させ、コーラル旋律を編みこむなど、とても創意を凝らした、変化に富んだ内容をもって人生を描いています。

「よく学術的研究の分野でも、勉学時代の区切りとして最初に手がけた大学の卒業論文のテーマが、その人の一生の主要テーマとなると言われる。作曲家として最初期に手がけた葬儀用のこのカンタータをもって、すでに両親と死別し、兄弟たちとも離散して自活の道に精進するバッハは、“神の時こそいとよき時”と名乗りをあげて世に出たのである。合唱に先立つ、ブロックフレーテ2、ヴィオラ・ダ・ガンバ2による透徹したくソナティーナは、すでにしてゆるぎなく人間の歴史と世界の深奥を見つめる青年バッハの息吹きを伝えている。聖書から適切に選ばれた短いテキストはバッハ自身によると考えられ、これから展開される彼の多彩な全作品群の〈故郷〉とも言えよう。静謐な諦念のうちに始まりながら人生の活発な局面が総括的にくりひろげられ、遂に迎える死の終曲は、あたかも無常の春にはらはらと散る桜の花びらの舞いを思わせる。壮年期の力強さはまだなく、それがかえって初々しく神聖・純粹の極致をしのばせてくれる。」(『バッハの音楽的宇宙』)

3. カンタータ《十字架を 勇みて 負わ ん》 BWV56

1726年10月27日、ライプツィヒ初演。

41歳のこの年の4月に第11子の誕生を祝い、6月に第8子(3歳)を葬ったセバスティアンは、多数の力強いカンタータを創りつづけ、10月には、この、バス独唱用のカンタータも生まれました。

ここでは私たちは、あなた自身のなまの声を親しく耳にするような気がします。この作品のなかで、何といっても、第1曲と第4曲とで繰り返されることば“重荷をかしこに葬り、涙を主はぬぐいたもう”に、私たちの心は深く印象づけられます。このことばに人生の慰めを得て信仰を深く培っている人々を、私は何人も知っています。セバスティアン、あなたの心をこんなに私たちに開いて聞かせてくださって、ありがとう。

「バッハは、ソプラノとテノールの声で、しばしば不信仰、まどい、罪の悔い、または若いひたむきな素朴な帰依の喜び、などを表現し、アルトでは、マグダラのマリアのような、思慮深く忍耐強く深々としたイエスへの愛を語らせ、そしてバスでは、〈キリストの声〉と呼ばれることがあるように、イエス自身の役割を担わせるか、またはペテロのような、多くの艱難を経て到達した使徒の忠誠・不動の歩みを表現させることが多い。したがって、バス独唱カンタータは、バッハ自身の立

場にもっとも近い声として私たちに迫ってくる。中でも秀逸なのがこのカンタータで、5曲からなるそのテキストは、始めから終わりまで一貫して神への信頼、イエスの苦難をわが身にも負うことのよろこび、そしてイエスのもとに憩う憧れと望みを、朗々と歌い上げている。しかも人生を船路にたとえ、荒波にさまたげられ難破の危険に遭遇しながらも、めざす都をひたすら仰ぎつつ、安息の港に導きいられるという美しい経路を表現するのである。……バッハはもうすでに、人生の経路を十分に悟りつくしている。光の歓喜を、闇のただ中であって予感している。だから自発的に“よろこんで”現前するみずからの十字架を負うことができるのである。」(『バッハの音楽的宇宙』)

4. 小ミサ曲 ト長調

BWV236

1738/39年頃、ライプツィヒで成立。

1736年に<宮廷作曲家>の称号を得たことに感謝して、BWV233-236の小ミサ曲を、カトリックのドレスデン宮廷に献呈したと推定されています。ルター派の礼拝でも演奏されたのでしょうか。

これらの小ミサ曲には、多くのカンタータからのパロディー(転用)が含まれています。あなたは《ロ短調ミサ曲》でも、《クリスマス・オラトリオ》でも、記念碑的な大曲をほとんどこのようにして、既作の多くの音楽からふさわしいところを摘み取ってきては、ひとつの大建築物として復活させてきました。これもまた、作曲上のすぐれた一技法として、大いに評価されるあなた独自の才能なのです。

この《ト長調ミサ曲》では、全6曲が次のような源泉(4つのカンタータ)から成り立っています。

- 1) Kyrie : BWV179-1 合唱<心せよ、汝の敬神の偽りならざるかを>(1723年初演) Gloria : BWV79-1 合唱<主なる神は日なり、盾なり>(1725年初演)
- 2) Gratias : BWV138-4 バス・アリア<わがよりのたのむはみ神>(1723年初演)
- 3) Domine Deus : BWV79-5 ソプラノ・バス二重唱<神よ見捨てたまわざれ>(1725年初演)
- 4) Quoniam : BWV179-3 テノール・アリア<偽れる偽善者らの似姿は>(1723年初演)

5) Cum Sancto Spiritu : BWV17-1 合唱<感謝のささげものをなす者>(1726年初演) 楽器編成はオーボエ2と弦合奏という簡素なもので、たとえばカンタータ79番ではホルン2、ティンパニ、フルート2、オーボエ2と弦合奏という、きわめて派手だったものを、ここまで簡素化させながら、声楽部分は重みを減ずることなく、かえって緻密な動きが浮き彫りとなって、歌うもの聴くものの心をわくわくと弾ませます。

こうして音楽化されたミサ曲のテキストは、さすがにキリスト教会の歴史の年月を経て洗練され、整備されつくした神への祈りであることを、納得させてくれます。今回、ミサのテキストは、各曲のタイトルとなる冒頭のフレーズのラテン語をそのまま残し、次のフレーズからは日本語にしてみました。ミサなどのテキストをドイツ語に消化したあなたの国の伝統もあることですし、さほど違和感なく移行できたのではないかと思います。ただし、近い将来もういちど《ロ短調ミサ曲》を演奏するときには、また原曲どおりラテン語にします。それは、キリスト教信仰を一語一句ゆるがせにはできない<クレード>(ニケア信経)が含まれていて、信徒の方々からお叱りを受けないようにとの配慮からなのです。

5. アンコール曲について

BWV668

これも、一度ぜひしみじみと味わってみたいと思っていた、セバスティアンの臨終まで推敲を重ねていたコラールで、《種々の技法による18のライプツィヒ・コラール》の最初に入れられています。

BWV668 : 印刷譜では „Wenn wir in höchsten Nöten “(われら悩みの極みにありて) というタイトルだったものを、“失明しながらも、友人のひとりに口述筆記させた”あなたの心情にちなんで „Vor deinem Thron tret

ich “(なが み前に いで) というタイトルに直されたものです。5分強のオルガン・コラールのあと、ひきつづき混声4部合唱で2節歌って、あなたの最期を偲びたいと思います。

なが み前に いで
主よ せつに ねごう
愛の み顔
わが 罪に 向けたもうな

わが 終り めでて
み手に わが たまを
憩わしめたまえ
祈り ききたまえ

新刊紹介

青木道彦著『エリザベス I 世』(講談社現代新書、1月刊)

森井 眞

16世紀後半のフランスでは、ユグノー戦争と呼ばれる残虐な宗教戦争が、断続して40年近くも戦われた。同じキリスト教徒同士がカトリックとプロテスタントに分かれて、ときには親と子が、兄弟同士が、殺し合った。アンリ3世王が暗殺されたあと、プロテスタントのナヴァル王アンリが王位を継ぐことになったが、熱心なカトリックのパリ市は門を閉ざしてアンリを王として迎えることを拒んだ。アンリは徒らな流血を好まず、カトリックに改宗してアンリ4世として聖別され、ナントの王令によりプロテスタントにも信仰の自由を認めてユグノー戦争を終息させた。アンリは節操を捨てたのではない。わざわざカトリックの教義を学び、納得したうえで、相対的なものを絶対化することを避けて改宗したのであり、かれにとって大切なものは、カトリックかプロテスタントかの問題より、国民のひとりひとりがちゃんと鶏の肉を食って安らかに暮らしているかどうかということだった。

しかし、人類はこれで宗教上の不寛容の問題を卒業したわけではない。いまでもアイルランドではカトリックとプロテスタントが対立し、武器を捨てることができないでいる。それはなぜなのか。

エリザベス1世はユグノー戦争が始まる少し前に登極し、アンリ4世の治世のなかばまで在位して、フランスの宗教戦争の経緯を見届けた。イギリスではエリザベスの父ヘンリー8世が離婚を認めないローマ教会と訣別して英国国教会を樹立したが、国内には教会をカトリックに戻そうとする勢力と、逆にカトリック的残滓を取り除いて改革を徹底させようとする勢力が争い合っていた。エリザベスはどちらにも片寄らないように冷静に判断して英国国教会を確立することになる。

英国はその頃まだ一弱小国にすぎなかった。ドイツとスペインに跨る強大なハプスブルク家の野心。いち早く絶対王政を樹立してハプスブルク家と覇を争うヴァロワ朝のフランス。スペインとともに大航海に乗り出して植民地をひろげるポルトガル。ドナウ流域以南の東欧南部に進出してキリスト教世界を脅かすオスマン帝国。デンマーク、スウェーデン、ノルウェー3国のカルマル同盟など。さまざまな力が競い合う世界でエリザベスはときに大胆にときに慎重に、一つの力と手を組み他の力と戦いながら、さまざまな試練のりをきって植民地を拓げ、英国が大英帝国として世界に冠たる地位を占めるにいたる基礎を築くことになる。

エリザベスはいわば庶子であり、母アン・ブーリンは不義のゆえに処刑されている。権謀術数もただならず、いつ誰が塔に捕われ首を刎ねられるかもわからぬ疑心暗鬼の宮廷。力の政策と駆引きの支配する国際社会。誰

を頼るべきかも定かでない闇のなか、彼女は私利に走らず、英国を愛し、まことに賢明にその責任をみごとに果たしていった。

青木道彦氏の『エリザベス I 世』は、激動するヨーロッパの状況から、英国の経済や社会、宗教や文化などにいたるまで、じつに綿密に正確に描かれており、たんに過去の物語としてでなく、現在のアイルランド問題、カトリックのようにみえてプロテスタントに分類される聖公会の問題、宗教と政治の問題など、私たちがいま関心をよせる諸問題についても多くの示唆を与えてくれるに違いない好著である。

◇著者・青木道彦氏は、合唱団最初期からの熱心な後援会員でいらっしゃいます。

《バッハを気楽に語り合う会》に どうぞ

2000年7月3日(月) 18:30-20:30

目白聖公会 (JR 山手線・目白駅徒歩6分)

会費: 3000円(当日受付)

東京バッハ合唱団では、今年が J.S. バッハの没後 250 年にあたるのを記念して、第 87 回定期演奏会 (5 月 14 日) 第 88 回定期演奏会 (12 月、いずれも石橋メモリアルホール) を予定していますが、もう一つの企画として、上記の会を一般公開することにします。

1962 年創立以来、毎年 7 月 1 日の合唱団創立記念日を祝って、辻莊一先生・遠山一行先生その他多くの講師による講演も行い、晩餐会をつづけてきました。今年は新しい試みで、200 名余りおられる後援会員の中から、青木道彦氏・原田二郎氏ほか 2 名の方々におねがいして、ご自分のバッハ体験を 20 分ずつお話しいただき、その後軽食を共にしながら、出席の皆様と気楽にバッハをめぐるトークを展開さ

バッハ・カンタータ 50 曲選 出版ニュース No.2

いよいよ楽譜の出現が近づいてきました。第 1 弾としては、5 月 14 日の定期演奏会に演奏するカンタータ全 3 曲 (BWV56、106、156) と、12 月の定期演奏会用の BWV16、計 4 曲の楽譜が、3 月中に出来上がる予定です。今後の演奏会では、ステージでも、オレンジ色の地にブラウンの文字の、あざやかな表紙が、東京バッハ合唱団のステージカラーとなります。

予約お申し込みの方には、当日を待たず、出版の時点でお届けいたしますので、十分あらかじめ曲目になじんでいただける余裕がとれます。

予約の場合も、演奏会当日即売も、各曲ごとの 1 冊ずつの販売もいたしますので、ご利用ください。第 1 期の残りの 6 曲も、5 月の演奏会までには全部揃い、定価は次のようになります。

No.1 カンタータ第 4 番 (56 頁、1900 円)

No.2 カンタータ第 6 番 (28 頁、1400 円)

せてみたいと思います。

さらに記念品として、合唱団で製作するポール・デュ・ブシェ著『カントル・バッハ』（全6章、大村恵美子訳）をお持ち帰りいただくことにしています。

なお、この会に参加なさらなくても、上記の本をご希望の方は、お申し込みいただければお分けします（頒価 1200 円、送料共）。

東京バッハ合唱団の団員・団友・後援会員の皆様はもとより、一般の方々のご参加をお待ちします。

お申込先：東京バッハ合唱団

〒156-0055 世田谷区船橋 5-17-21-101

Tel:03-3290-5731 Fax:03-3290-5732

E-mail:bachchor.tokyo@aol.com

- No.3 カンタータ第 8 番 (32 頁、1400 円)
- No.4 カンタータ第 16 番 (28 頁、1400 円)
- No.5 カンタータ第 19 番 (40 頁、1700 円)
- No.6 カンタータ第 21 番 (56 頁、1900 円)
- No.7 カンタータ第 56 番 (20 頁、1200 円)
- No.8 カンタータ第 84 番 (20 頁、1200 円)
- No.9 カンタータ第 106 番 (28 頁、1400 円)
- No.10 カンタータ第 156 番 (20 頁、1200 円)

予約申込の場合：

①全 50 曲セット：特価 65,300 円（送料共）

（①は、東京バッハ合唱団関係者にのみ限定）

②第 1 期 10 曲セット：特価 13,800 円（送料共）

（定価合計 14,700 円のところ）

予約特価期限：2000 年 4 月 30 日

お申込み／お問合せ先：東京バッハ合唱団

カントル・バッハ —— 連載 16

第 6 章＜音楽の献げもの＞

ポール・デュ・ブシェ

訳：大村恵美子

＜フーガの技法＞、そこにあるのは秩序のみ

バッハの死の 3 年前、彼はかくも単純な主題の最初の小節を書きました。彼はその主題を、絶対美の音楽のなかに永遠化させることとなります。1747 年、一つの組曲とも見なせる＜音楽の献げもの＞を完成させたあと、彼は＜フーガの技法＞に没頭しました。そこにもまた、すべてが同じ主題、同じ調性に基づいた対位的な一連の変奏曲があります。しかし、＜音楽の献げもの＞では、カノンの理念が支配しているのに対し、ここ

ではフーガ的書法のあらゆる可能性が試みられるのです。

<フーガの技法>は、<音楽の献げもの>や<カノン風変奏曲>と同様、音楽学術協会の“科学的交流”の機能を果たすことになりました。バッハの最初の計画では、まず間違いなくあらゆる同質性に従って、24曲のフーガをとり入れることであったようです（つまり、4曲の6グループ。1曲については、2つのフーガ2回、原形主題 *rectus* と転回形 *inversus* という2つの相に提示された主題から発する変奏曲という構成）。それは、1749年に終わるはずでした。しかし1750年3月21日、65歳になったバッハは、協会でも“名誉”会員のなかに入れられ、この称号をもって、年間行われる交流の義務を果たすことを免除されました。彼は（歴史家たちの実際のカテゴリによると）21曲のフーガしか書けませんでした。そして、最後の曲は中断を余儀なくされました。病の影が、これらのすばらしい広がり、ヴェールをかけに現れたのです。

<フーガの技法>は一つの宣言のようなものであり、語り尽くしたすえに沈黙した音楽の宣言、音楽的結晶の建築物、あるいは世界から抽象され、抽象されつくしたような純粹性の建築物に還元された音楽の宣言です。<フーガの技法>を聴き取ることの極限——そこでは、死の成就という、もう一つの完成に近づいたものだけが聴くのです——へと導いた完成にきわめて近いのです。

イラスト(16) J.S.バッハの影絵と、リンデナウから見たライプツィヒ。 J.A.Thiele作油彩画。ライプツィヒ造形芸術博物館。

線と逃走

フーガの原理は、比較的単純なものです。ある旋律的な動機または主題が、数声部（ソプラノ、アルト、テノール、バス）のうちの1声部に提示され、それが他声部に再現され、“模倣”されます。この模倣された動機は、原形と等しかったり、もっと短くあるいは長く、もっと遅くあるいは速くなったり、最初の動機の反行形になったり、さまざまに変化することができます。それらの組み合わせは無限です。フーガの複雑さにしたがって、2つ、3つ、または4つの主題が存在することもあります。

<フーガの技法>では、一つのフーガからつぎのフーガへと、主題が提示され、反行されます。声部や主題は重なり合い、12と14の有名なフーガにいたるまで、限りなく応答し合います。一つの鏡のなかの光線のように、2重、3重、4重になったあらゆる種類のフーガやカノンが、たがいに反射し合います。あらゆる可能な形式のもとに組み合わせられたり、絡み合った主題と対位主題とが一つの建築物を構成し、そのいくつもの線は、終りなくしかし絶えず再発される螺旋となって、空に向かって消えてゆくように思われます。

ついに、21番目の荘重なフーガは、死が近づいて、中断されます……。もはや引き返せぬことを悟ったように、バッハは署名します。彼の名前 B.A.C.H.（変ロ、イ、ハ、ロ）の文字によって作られている、第193小節の主題は、苦悩にみちた半音階の順次進行でした。